

○アダムとイブ (小林義雄) Yosio KOBAYASHI: Adam et Eve.

數年前の年の暮に親しい者ドチで一夕の會合を催したことがある。何しろ未だ不如意な際とて財布の底をはたいた結果やつと手に入れたのが、不擱ひでしかも頭數だけもないリンゴや他の果物……これらを以てささやかな食卓を飾り、いざ皆で分けようと云ふ事になつた。併し普通の分け方では面白くない。そこで詰の泉で行こうといふ案が出たが、何しろ集ふ者は植物界では物識りと自他(?)共にゆるす面々である。いささか出題者も首をひねつた末、思ひついたのがリンゴに因んで“アダムのリンゴ”から初まり、“アダムの橋”“アダムの針”“アダムの酒”と續き“アダムとイブ”に終る一聯の名詞である。その結果は、よもやと思はれた名を首尾よく當てて“アダムのリンゴ”的傍らをいとも滑らかに通過させたA君、數年間舌頭に載せる機會のなかつたバナナについてエビス顔のB君等。それに引かへ順次に姿を消して行く果物をうらめしげに見送る出題者たる我輩の心情。しかし計畫はうまく當り最後のアダムとイブで一同はたと行詰つた。沈黙暫時、會心の微笑を以てイデヤときり出したのが次の解説である。

「アダムとイブ」は一種の植物である。若しこれをうたぐる者があるならば座右にある大英和辭典でも御覽なさい。しかし何故そう云ふことになるかと云ふ理由は辭典にも出て居らない。その鍵は實はこゝに掲げた一枚の畫にあるのである。これはフランスのフランクーロー(Plaincourault)にある廢墟となつた或禮拜堂内のフレスコ壁畫である。1291年の作と云はれこの繪が原圖から模寫されてから既に40年を経ているから、現在も尚ほ殘されているかどうか甚だ疑はしい。一般にアダムとイブに関する繪は世界に相當に多いが、ミケランジェロの畫いたシスチーン禮拜堂の天井畫をはじめとして、アダムとイブとの間にある生命の樹は大抵リンゴであつて、これに蛇がからまつて居るのが原則である。然るにこのフレスコ畫は枝分れしたベニテングタケが生命の樹となつて居り、イブは今正に禁斷の木實ならぬベニテングタケを食べ終り、何等中毒作用も起さぬのでいささか安心したやうで、併しなほ懷疑の容子が顔色に伺はれるのである。左側のアダム氏はどうも影が薄いが、横顔の鬚武者らしい。

「アダムとイブ」は斯くしてベニテングタケ、つまり毒キノコの意となるが、これを單に當時の無名の畫工の妙な思いつきと解釋して済ますのはをしい氣がする。ずっと以前に紹介したことがあるがシベリアの住民はウオツカにベニテングタケを入れて、其のしびれる様な一時の陶酔を求めることが知られて居り、我國では信州及び東北地方でこれを乾して食べて居る。昔ロシアの某皇帝やフランスの某伯爵はこのため一命を失つてゐる。最近テングタケを簡単に料理して食べ、極めて美味であることを知つたのは林業試験場の今關部長である。料理試験をパスした板前さんによるフグ料理よりも、一か八かの生命を賭してつまり情熱を以て食べたフグの味の方が數倍美味であつたらう。斯様に考へて來ると命がけで禁斷のキノコを食べているこのフレスコ畫の寓意も判らぬ譯ではなく、ひそかにこの繪を畫いた無名のフランス畫家に敬意を表する次第である。

斯くして最後にありついた數年振りのバナナの味は期待した程のものでもなかつた。